

Eureka VI

六年制通信 No. 30 平成 31 年 1 月 26 日(土) 号

『随想録』より

モンテーニュ (Michel Eyquem de Montaigne 1533-1592) はルネサンス期のフランスが誇るモラリストですね。彼の著書 *Les Essais* (英語の *Essay* です。少し意味が違うけど) が仏文学者の関根秀雄によって『随想録』として出版されたのが 1928 年です。モンテーニュの死後 330 年以上たって日本語で読めるようになったわけです。ただ、三巻の大冊なので気楽に手に取れないですね。角川文庫にこの選抄が出たのが昭和 26 年ですから、1951 年ですか。皆さんにはこの文庫版をお勧めします。

短い随筆を集めたものなので、どこから読んでも読みやすく (時代背景がわからないと何のことかわからないことも多々ありますが) 私も時々読むようにしています。教えられることが多い書物です。

モンテーニュは三人の人を挙げて、自分の最も尊敬する最高の人物だと言っています。ホメロス、アレキサンダー大王、そしてエパミノダス (エパメイノンダス) ですが、関根さんによれば、この中で終始一貫尊敬し続けたのはエパミノダスだけだろうということです。三人とも歴史上の人物ですが、皆さん、それぞれの功績を調べてごらん。面白いから。

さて、モンテーニュは読書についてのエッセイでこう述べています。

- ・「私が愛するのは、ただ面白くやさしくて私をくすぐる書物か、でなければ、私が自分の生と死とを調節するにあたって慰めとも力ともなるような、書物だけである」
- ・「歴史の本が私の最も好んで読みあさるものです。否、詩こそ私が特に好んで読むものでございます」
- ・「読書は、私が様々な問題によって私の推理を喚起することに、私の記憶力ではなしに私の判断を働かすことに役立っている」

味わい深い言葉ですね。私は以前、というか何度も、皆さんに読書に親しむように言ってきました。地理も時代も遠く離れた人々が、同じような物語を生んで子孫に伝えています。それらを読めば、人間というものの本質を知ることができる、私の恩師はそうおっしゃっていました。私もそう思います。そして、人間はそう変わらない者なのだということも理解でき、古の人の言葉に、知恵に、耳を傾けようとするのですね。モンテーニュの尊敬する三人も彼より 1800 年以上前の人々です。

それに、今も昔も人間関係に悩むのが人の常ですが、その原因の一つは、他人も自分と同じように哀しい場面で泣き、楽しい時には笑うものだと信じているからだと思うのですが、それが自分の勝手解釈であることを世界中の様々な物語が教えています。

自分の感性は誰もが持っている勝手に解釈しているから、他人との無用な軋轢を生むのです。あるいは、今の自分の悩みは他にはない自分だけのものだと、若者は思い込んでしまいがちですが、今までにいかに多くの人々が同じ悩みを抱えてきたか、そしてどのように克服してきたか、そういうことも書物は教えてくれます。これから皆さんが多くの物語に出会えるように、そして読むたびに、心が強くなっていくよう祈っています。私もどんどん好きな本を紹介していきますね。

話は変わりますが、西門の宣長像に向かって右手に桜の木が一本あります。今は花も葉もなく、ひたすら春の訪れを待っていますね。寒がりの私は一見枯れてるかのように見えるその木を見るたび、一つの詩を思い出します。内村鑑三の「寒中の木の芽」という詩です。紹介しますね。

春の枝に花あり 夏の枝に葉あり 秋の枝に果あり 冬の枝に慰あり
花散りて後に 葉落ちて後に 果失せて後に 芽は枝に頭はる
嗚呼憂に沈むものよ 嗚呼不幸をかこつものよ 嗚呼冀望の失せしものよ 春陽の期近し
春の枝に花あり 夏の枝に葉あり 秋の枝に果あり 冬の枝に慰あり
(読み方 慰：なぐさめ 頭：あら 冀望=希望 春陽：はるひ 期：き)

内村はどのような気持ちでこの詩を読んだのでしょうか。想像が膨らみませんか。

今週のおすすめ

・湯本香樹実 『夏の庭 The Friends』 (新潮文庫)

中学受験を控えた小学生三人組が主人公。山下が祖母のお葬式から帰ってきたのをきっかけに、三人は人の死に関心を持つようになります。そして、近くに一人で暮らす老人を「観察」し(後をつけたり、家の中をのぞいたりして)、やがて訪れるであろう死を自分たちの目で確かめようとします。やがてその観察は老人の知るところとなり、そこから老人と子どもたちに奇妙な交流が生まれます。大人の入り口に立つ少年たちと人生を終えようとする老人の交流が、少年たちを成長させていく物語です。

少年たちの性格もよく描かれていると思いますが、もう少し長い物語にしてほしかった気がします。プロットはいい。ただ、別の作家だったらひょっとしたらもっとうまくプロットを活かしたかもしれないと、そんな作家が何人も浮かびました。

・阿刀田高 『短編小説より愛をこめて』 (新潮文庫)

阿刀田さんは短編小説を愛しているのですね。この本はエッセイ集です。第2章はすべてギリシア神話に関するものです。これはこれで十分面白いのですが、私がこの本をお勧めするのは、巻末に「私の愛した短編小説 20」、つまり阿刀田さんお勧めの短編が紹介されているところです。そこには私の好きな中島敦の『文字禍』やモームの『雨』も入っていて、何だか嬉しい。出版社も明記されていますから、君たちも探してごらん。もし今読んで面白く感じなくても、君たちが大人になって再読したらきっと感想が違っているはずですよ。ですから自分の本棚に集めておきましょうね。ん？自分の部屋に本棚、あるんでしょうね。

BGM は山本潤子の 雨のステーション でした…。